



物

語

の

王

国



暗くなり待ち



舟崎克彦

暗くなり待ち

舟崎 克彦



白水社

著者略歴

一九四五年東京生

学習院大学卒業
主要著書

「ぼっぺん先生」シリーズ（赤い鳥文学賞、路傍の石文学賞）

「雨の動物園」（国際アンデルセン賞）

「あのこがみえる」（ポロニーヤ国際図書館展グラフィック賞）

「鐘は鳴り私はのこる」他

物語の王国

暗くなり待ち

一九八九年一月一〇日印刷
一九八九年一月二七日発行

著者 © 舟崎 克彦

発行者 高橋 孝彦

印刷者 田中 昭三

発行者 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話 営業部〇三（三）七八一一

編集部〇三（三）七八二一

振替 東京 九一三三二二八

郵便番号 一〇一

理想社印刷・黒岩製本

ISBN 4-560-04552-6
Printed in JAPAN

暗くなり待ち

装帧
||
公司
修

目次

序章	5
ナンパ大通り	28
島へ……	50
鷺島	79
初夜	138
未明	217

序章

打ち上げコンパでは大堂満が乾杯の音頭をとることになった。
何の言葉も用意して来なかったので、座敷に居流れている研究生たちをひと渡り見やると、

「お疲れさま」

一言で役目を片づけた。

「素気ないもんですな」

隣に座を占めている馴染みの記者が、大堂に銚子を傾ける。

「ああ」

半ば上の空で大堂は、猪口ちよこをつき出した。

「しかし心丈夫だ、若手が順調に育っていて」

記者の言葉に、

「順調？」

大堂は不機嫌そうな顔を上げた。

「どこが」

彼等の卒業公演を思い出すだに目を覆いたくなる。

声は出来ていないし、滑舌もいい加減だ。

おまけに早口を競うような科白廻し。マイクなどという文明の利器がなかったら、かぶりつきの客にも聴き取れないだろう。

その上、皆が皆、判で捺したように、科白とは何の関連も持たぬ大仰な所作で目立ちたがる。

役作りなどやっているとは到底思えなかった。演出は一体、毎日の稽古で何を教えていたのか。

こんな連中がこれからの劇団を支えて行くつもりなのかと思うと、失禁しそうだ。

大堂の独白が耳に入らなかったのだろう、記者の隣席に正座をしている演出の田所が、相好を崩して、

「いやあ、目利きの畔上あぜがみさんに褒めて頂くと、本当に自信がきます」

と、酌の手をのばす。

記者の畔上は、大堂が手塩にかけてきた劇団『鵲かきさぎ』に創立の頃から目をかけてくれる。

と云って、いつでも提灯記事を書いてくれた訳ではない。

むしろ、劇団経営の苦しい時代に、こんな時こそヨイショしてくれれば助かるのに、と願っている大堂の心情を、解っていながら、敢えてボロクソにけなしてくれたりする、硬派の劇評家であった。

大堂にしてみれば辛口の筆勢で鳴らすそんな男が「あんな程度の」ものを良しとするなど、合点の行かないことであつた。

「お加減でも悪いんですか」

片隣にかしこまっている舞台監督ブタカシの莊司が大堂をのぞき込んだ。

「別に……いつだって、こんな風だろう」

盃をあおって酌を促した。

「記者が褒めているのを主宰者が気に入らないという場面も珍しい」

畔上が半疊を入れると、身近の下座で複雑な笑いが起こった。

「けなせば不機嫌、褒めても不愉快」

畔上は空の猪口を、大堂の前にさし出した。大堂が酒をつぐと、

「ま、『最高!!』ってわけじゃないが、未熟者たちの卒業公演にあれだけ人が来て、あの程度ウケるってことは、常識はずれのことじゃあるね」

「笑いが取れりゃいいってもんじゃない」

大堂は殆ど独りごちた。

「観客が役者を甘やかすんだ。どうせやつらの親類縁者が義理でつめかけただけのことさ」

「いや、一般の客が多かったみたいですよ」

莊司が真顔で口をはさんだ。

「田舎を捨てて来た親不孝者に義理を立てて出て来る親類も、そうはいないでしょう」

「笑いなんてものは、だな」

大堂は莊司の言葉に耳を貸していなかった。

「笑いなどというものは、さ」

「観念の範疇には所詮入らないものだ」

畔上が大堂の言葉を継ぐ。

「そうさ」

大堂はいくらか我が意を得て表情をほころばせた。

「だから、あんな程度で喜んでちゃ駄目だって云うんだ」

「いいや。それは違うんじゃないかな。おい、もうちょっと辛い酒はないのかよ」

畔上は顔をしかめて、幹事の方へ銚子を振る。

「観念なんかにこだわっているうちは、駄目なんでね」

「……？」

大堂がムツとした顔にもどると、

「あなたの小屋は、イデオロギーからぬけ出してから持ち直したんじゃないの。そこんところは認識しといた方がいい」

畔上は、団員たちの間をリレーされて来た持ち込みらしい酒瓶を、大堂の盃に傾けた。

「何だ、それは……」

大堂が問いかけると、

「辛口の酒だよ」

「いや、そうじゃなくて。時代が変わったんだ、とか云いたい訳なのか」

「変わったんじゃないでさ」

畔上は、盃をコップに換えて手酌を始めた。

「大堂さんのかかげて来た姿勢が今の流れを育てもしたんだ、っていうことさ」

「ふん」

「『鵲』の初期には、ああいう様式を時代が求めていたんだから、それはいいじゃないか。俺はそれを否定している訳じゃないんだ」

初めのうちは、かしこまって二人のやりとりに耳を傾けていた若者たちだが、彼等にとっては、大堂たちのこだわっているような論理性など縁もゆかりもないのである。やがて大人の話題にさじを投げると自分達同士の雑談が始まり、座がさんざめいて行くにつれ、下座にしつらえられたカラオケ用のステージで、お調子者がパフォーマンスを始める。

「ま、いいか」

大堂にはそれ以上、畔上に反論する材料はなかった。

『鵲』が、ギャグでウケを取る態の台本に場を与えたことが、上昇気流に乗るきっかけ

だったことを思えば、口をつぐまざるを得ない。

遠野小夜と二人三脚で劇団を興してから二十五年が過つた。

その大半は苦しい台所のやりくりで凌いできたが、小夜のひとり息子加倉井新の台本を起用してから状況が一変した。

若者独自の、ひらめきと場当たり的な言葉遊びと、青臭い欲求不満の暴発に彩られた台本は、小夜や大堂のような「或る時代の演劇人」にとっては空疎な茶番としか思えず、そんなものを舞台にかけること自体、志にもとるものだと黙殺していたのだったが、研究生たちの稽古に一寸使ってみたところが、彼等の反応がとびぬけて良かったのである。

「じゃ、試しに地方公演に乗せてみましょうよ」

小夜の発案を大堂がしぶしぶ吞むと、その結果は思いもよらぬ観客動員をもたらした。

『鵲』の名は皮肉にも、地方から逆輸入のかたちを取って、半年ほど各地を転々としたのちに東京へ戻って来た時には、大堂と小夜の劇団と云うよりも、加倉井新の舞台と云う方が通りが良いのではないかと錯覚するほどの沸騰ぶりであった。

「ところで先生」

莊司が銚子をさし出した。

「映画の件は、大丈夫なんですか」

「……うん」

大堂は盃を置いて、初めて莊司に酌を返した。

「大丈夫だ」

「親の心子知らず、ですね」

莊司は研究生たちの乱痴気騒ぎを眺めやった。

「ん？ 何かトラブルでもあるの？」

畔上が耳ざとく二人のやりとりを聞きつけた。

「いや、別に……」

大堂はその話題を避けるように、

「おい誰か、銚子をくれ」

誰にともなく声をかけて会話を遮断した。

すると、無礼講の人波をかき分けるようにして今日の主役をつとめた娘が、膳の前へ進み出た。

「先生、どうぞ」

今どき珍しい和ごとのたしなみを感じさせる手つきで酒を注ぎ、銚子を置くと、

「本日はどうも有難うございました」

大堂の前で三つ指をついた。

「先生のお蔭で大役を戴きました澤田麗花です」

この娘のオーデイションには立ち会った記憶がある。

「キャスティングは俺じゃないよ」

大堂は無表情で盃を明けた。

「ああ、澤田麗花。君は目に力がある」

畔上が口をさしはさむ。

「目に力のない奴はこの世界じゃ大成しない」

女優は畔上の方へ居ずまいを正して頭を下げた。それから大堂を畔上の云う「力のあ
る」切れ長の目で見上げた。

「御返盃を戴けますでしょうか」

「えらい古風な娘が入ってきたもんやなあ」

畔上は酔いが廻るときまって出てくる関西弁になった。

大堂は彼女に酒をついでやると、

「ちょっと……」

莊司の肩に体をあずけて立ち上がった。

「手洗いに行つて来る」

酒呑みの大堂にとっては口汚し程度の酒量なのに、足元がおぼつかなくなっている自分に驚きながら、彼は上座の唐紙をあけると廊下へ出、つき当たりにある手洗いの脇をすりぬけ、階下のレジへ直行した。

「今日の請求は劇団にお願いします」

「毎度有難うございます」

会計の声を背に戸口へ立つと、自動ドアのあいた途端、思いもよらぬ雨足が大堂の目前をさえぎった。

のれんをあおりながら、驟雨は視野に夥しいひっかき傷を立てて未舗装の路地に味噌汁色の飛沫を上げていた。

「先生、お傘」

女将がビニール傘を抱えてかけ寄つて来たが、